

## 2023年6月の地震活動の評価（案）

## 1. 主な地震活動

- 6月11日に苫小牧沖（\*1）の深さ約140kmでマグニチュード（M）6.2の地震が発生した。この地震により北海道で最大震度5弱を観測し、負傷者が出る被害を生じた。

## 2. 各領域別の地震活動

## (1) 北海道地方

- 6月3日に浦河沖の深さ約65kmでM5.1の地震が発生した。この地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。
- 6月11日に苫小牧沖の深さ約140kmでM6.2の地震が発生した。この地震の発震機構は太平洋プレートの傾斜方向に張力軸を持つ型で、太平洋プレート内部で発生した地震である。  
GNS観測の結果によると、今回の地震に伴う有意な地殻変動は観測されていない。
- 6月19日に十勝地方南部の深さ約60kmでM5.0の地震が発生した。この地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

## (2) 東北地方

- 6月17日に青森県東方沖の深さ約30kmでM5.7の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。
- 6月24日に福島県沖の深さ約40kmでM5.0の地震が発生した。この地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ型であった。

## (3) 関東・中部地方

- 2018年頃から地震回数が増加傾向にあった石川県能登地方の地殻内では、2020年12月から地震活動が活発になっており、2021年7月頃からさらに活発になった。2020年12月1日から2023年7月10日08時までに震度1以上を観測する地震が452回発生するなど、地震活動が活発な状態が継続している。  
一連の地震活動において最大の地震は、2023年5月5日14時42分に能登半島沖（\*2）で発生したM6.5の地震である。M6.5の地震発生以前の地震活動は、主に能登半島北東部の陸域及び沿岸域付近で発生していた。M6.5の地震の発生以降は、地震の活動域はさらに北から東側の海域にも広がっている。6月1日以降も7月10日08時までに最大震度1以上を観測した地震は19回発生している。地震活動は時間の経過とともに減衰し、全体として地震の発生数は概ねM6.5の地震が発生する前の状況に戻っている。

G N S S観測の結果によると、2020年12月頃からM6.5の地震が発生するまでに、石川県珠洲（すず）市で累積1cmを超える移動及び4cm程度の隆起が見られるなど、地殻変動が観測されていた。また、G N S S観測や陸域観測技術衛星2号「だいち2号」が観測した合成開口レーダー画像の解析結果によると、M6.5の地震に伴って、震央周辺で最大20cm程度の地殻変動が見られた。M6.5の地震後は、複数の観測点で地震前の傾向とは異なる変動が見られている。

これまでの地震活動及び地殻変動の状況を踏まえると、一連の地震活動は当分続くと考えられる。強い揺れや津波には引き続き注意が必要である。

- 6月4日に千葉県北西部の深さ約70kmでM4.6の地震が発生した。この地震の発震機構は東西方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートとフィリピン海プレートの境界で発生した地震である。
- 6月16日に千葉県北東部の深さ約50kmでM4.9の地震が発生した。この地震の発震機構は東西方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートとフィリピン海プレートの境界で発生した地震である。

今回の地震の震源付近では、2023年5月26日にM6.2の地震が発生し、6月16日の地震を含め5月26日から6月30日までに震度1以上を観測した地震が12回発生した。

#### (4) 近畿・中国・四国地方

目立った活動は無かった。

#### (5) 九州・沖縄地方

- トカラ列島近海（口之島・中之島付近）では、4月1日頃からまとまった地震活動があり、4月1日から6月30日までに震度1以上を観測する地震が132回発生した。6月に発生した最大の地震は、6月1日に発生したM4.3の地震である。
- 6月22日に沖縄本島近海の深さ約40kmでM5.2の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に張力軸を持つ横ずれ断層型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。

#### (6) 南海トラフ周辺

- 南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。

#### (7) その他の地域

- 6月28日に日本海北部の深さ約520kmでM6.3の地震が発生した。この地震の発震機構は太平洋プレートの沈み込む方向に圧力軸を持つ型で、太平洋プレート内部で発生した地震である。この地震により北海道地方から東北地方にかけて震度3から震度1を観測したが、沈み込む太平洋プレート内を伝わった地震波により、北海道地方から東北地方にかけての太平洋側で揺れが大きくなった（異常震域）。

\* 1：気象庁が情報発表で用いた震央地名は「浦河沖」である。

\* 2 : 気象庁が情報発表で用いた震央地名は「石川県能登地方」である。

注 : G N S S とは、G P S をはじめとする衛星測位システム全般をしめす呼称である。

## 2023年6月の地震活動の評価についての補足説明

令和5年7月11日  
地震調査委員会

### 1. 主な地震活動について

2023年6月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード(M)別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ93回(5月は141回)及び14回(5月は28回)であった。また、M6.0以上の地震の発生は2回(5月は4回)であった。

- (参考) M4.0以上の月回数81回(69-104回)  
(1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)  
M5.0以上の月回数10回(7-14回)  
(1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)  
M6.0以上の月回数1回(0-2回)  
(1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)  
M6.0以上の年回数16回(12-21回)  
(1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

2022年6月以降2023年5月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあった。

- |                      |             |                         |
|----------------------|-------------|-------------------------|
| — 石川県能登地方            | 2022年6月19日  | M5.4(深さ約15km)           |
| — 熊本県熊本地方            | 2022年6月26日  | M4.7(深さ約10km)           |
| — 上川地方北部             | 2022年8月11日  | M5.4(深さ約5km)、M5.2(ごく浅い) |
| — 大隅半島東方沖            | 2022年10月2日  | M5.9(深さ約30km)           |
| — 福島県沖               | 2022年10月21日 | M5.0(深さ約30km)           |
| — 茨城県南部              | 2022年11月9日  | M4.9(深さ約50km)           |
| — 釧路沖                | 2023年2月25日  | M6.0(深さ約65km)           |
| — 能登半島沖              | 2023年5月5日   | M6.5(深さ約10km)           |
| — 千葉県南部              | 2023年5月11日  | M5.2(深さ約40km)           |
| — トカラ列島近海(口之島・中之島付近) | 2023年5月13日  | M5.1                    |
| — 新島・神津島近海           | 2023年5月22日  | M5.3(深さ約10km)           |
| — 千葉県東方沖             | 2023年5月26日  | M6.2(深さ約50km)           |

### 2. 各領域別の地震活動

#### (1) 北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

#### (2) 東北地方

東北地方では特に補足する事項はない。

#### (3) 関東・中部地方

- GNSS観測データの精査の結果、2023年5月26日に千葉県東方沖の深さ50

kmで発生した M6.2 の地震に伴って、ごくわずかな地殻変動が観測されたことがわかった。

#### (4) 近畿・中国・四国地方

－ G N S S 観測によると、2019 年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、四国中部周辺のフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。

#### (5) 九州・沖縄地方

－ G N S S 観測によると、2023 年初頭から九州南部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、日向灘南部周辺のフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。この地殻変動は、最近では鈍化しているように見える。

#### (6) 南海トラフ周辺

－「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。」：

(なお、これは、7月7日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解(参考参照)と同様である。)

(参考) 南海トラフ地震関連解説情報について－最近の南海トラフ周辺の地殻活動－(令和5年7月7日気象庁地震火山部)

「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時(注)と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

(注) 南海トラフ沿いの大規模地震(M8からM9クラス)は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が70から80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約80年が経過していることから切迫性の高い状態です。

##### 1. 地震の観測状況

(顕著な地震活動に関する現象)

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

(ゆっくりすべりに関係する現象)

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震(微動)のうち、主なものは以下のとおりです。

(1) 紀伊半島西部：6月11日から19日

(2) 四国東部から四国中部：6月18日から継続中

これらとは別に以下のとおり、プレート境界付近で浅部超低周波地震を観測しています。

(3) 種子島東方沖、大隅半島南東沖、日向灘及び宮崎県東方はるか沖：4月中旬から始まり6月中旬には収束

##### 2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られています。

G N S S 観測によると、2019年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。また、2023年初頭から九州南部で観測されている、それまでの傾向

とは異なる地殻変動は、最近は鈍化しているように見えます。

(長期的な地殻変動)

G N S S 観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

### 3. 地殻活動の評価

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2019年春頃からの四国中部の地殻変動及び2023年初頭からの九州南部の地殻変動は、それぞれ四国中部周辺及び日向灘南部周辺のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。このうち、日向灘南部周辺の長期的ゆっくりすべりは、最近鈍化しています。

これらの深部低周波地震(微動)、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

上記(3)の浅部超低周波地震は、これまでの観測結果や研究成果を考慮すると想定震源域のプレート境界浅部において発生したゆっくりすべりに起因する可能性があります。これは、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。この現象の発生頻度・規模等発生様式については今後も観測・研究が必要です。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

- |     |  |
|-----|--|
| 参考1 | 「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安<br>①M6.0以上または最大震度が4以上のもの。②内陸M4.5以上かつ最大震度が3以上のもの。<br>③海域M5.0以上かつ最大震度が3以上のもの。   |
| 参考2 | 「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安<br>1 「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。<br>2 「主な地震活動」として記述された地震活動(一年程度以内)に関連する活動。<br>3 評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、<br>「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。<br>4 一連でM6.0以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。 |